

黒－色彩バウムテスト再考

名島 潤慈

A reconsideration of the Black-Color Tree Test

Junji NAJIMA

I はじめに

筆者は1970年3月に広島大学教育学部心理学科を卒業後、精神医学を勉強するため広島大学医学部神経精神医学教室に研究生として入局した。そして、大学病院や精神神経科外来、さらには単科の精神科病院等で心理士としての活動を開始した。活動内容はカウンセリングの他、心理アセスメントがあった。心理アセスメントの用具は、ロールシャッハテストやTAT、P-Fスタディ、バウムテスト、エゴグラム等であった。

バウムテストは当初実のなる木の絵を鉛筆で描いてもらっていたが、1970年にたまたま神経精神医学教室に置いてあった雑誌のなかからFodorら(1966)の論文 *Vergleichende Beobachtungen von schwarzen und farbigen Baumzeichnungen bei psychotischen Patienten: Ein Beitrag zur objectiven Untersuchung der Affektivität bei Psychotikern* を見つけて読んだ。それは、黒色の木 (der schwarze Baum) と色彩の木 (der farbige Baum) の2つを比較するという2枚法であった。彼らは、精神科病院の統合失調症・精神遅滞・アルコール精神病など計200人の患者に対して鉛筆と色鉛筆でバウムテストを行っていた。

筆者はその後、1972年から、鉛筆による通常のパウムテストの代わりに「黒－色彩バウムテスト」を本格的に行うようになった。そして、現在も学生相談や教育相談の場において黒－色彩バウムテストを用いている。ちなみに、筆者は卒業論文でも修士論文でもロールシャッハテストを取り上げた。色彩と感情・情緒との関係性についての考え方は、ロールシャッハテストのKlopfers法の影響も受けている(名島, 2009)。[黒－色彩バウムテストはA4の白紙の1枚目に用紙を縦にして鉛筆で黒色バウム、2枚目にやはり用紙を縦にして色鉛筆で色彩バウムをかいてもらう。色鉛筆は12色で、どの色でも好きな色を使ってもらう。色はFodorらは赤(rot)・青(blau)・緑(grün)・黄(gelb)・茶(braun)・紫(violett)の6色であるが、筆者としてはそれでは少ない感じがして、赤(red)・青(blue)・緑(green)・黄緑(yellow green)・黄(yellow)・茶(brown)・紫(purple)・橙(orange)・桃(pink)・水(light blue)・薄橙(肌)(pale orange)・黒(black)の12色を用意している。ちなみに、当初は12色のなかに白色を入れていたが、1997年より白色の代わりに薄橙(肌)色を入れている。]

バウムテストに関する学会発表や論文はきわめて多いが、そのほとんどは鉛筆による黒色バウムである。なかには色鉛筆やクレヨン、パステル等を用いた色彩バウムもあるが(岩井ら, 1980; Cohenら, 1994; 水口ら, 2000; 道廣ら, 2010; 中村ら, 2011, 2012)、それらは鉛筆の代わりに色鉛筆やクレヨン等を用いたものであって、黒－色彩バウムテストのように黒色バウムと色彩バウムとを比較したものではない。黒－色彩バウムテストの最大の特徴は、黒色バウムと色彩バウムを比較するところにある(比較項目はバウム空間・バウムの内容の豊かさ・バウムの

バランス等)。もっとも、1枚目にかいてもらう黒色バウムは鉛筆による通常のバウムなので、それだけを単独に分析することは可能であるし、2枚目の色彩バウムでは木を描くの用に用いられた色の数や色名、バウム類型を検討できる。[統合型 HTP 法 (Synthetic House-Tree-Person) に関しては、無彩色版と彩色版を比較する試みがある。武藤 (2018) は鉛筆による無彩色版と 16 色の色鉛筆による彩色版とを比較して、2枚目の彩色版では描き手の防衛的態度が取れることや、心的エネルギー (意欲、余裕、バイタリティなど) をコントロールすることで、本来備えている描き手のパーソナリティや情意的側面、対人コミュニケーションの特徴がより端的に表現されると述べている。]

黒 - 色彩バウムテストの解釈や意義に関しては、当初はもっぱら精神科病院で黒 - 色彩バウムテストに関心を有する精神科医と一緒に検討し (名島ら, 1974; 増田・名島, 1975; 名島・増田, 1993)、その後は筆者自身で、あるいは筆者の指導学生・指導院生や臨床の仲間たちと一緒に検討した (名島, 1996, 1998, 1999; 今村, 1998; 森, 1998; 瀬下, 2000; 村田ら, 2001; 名島ら, 2001; 村田, 2002)。

ところで、筆者は最近、植田愛美が黒 - 色彩バウムテストについて一連の研究を行い (植田, 2013, 2018ab, 2019)、それらを博士論文 (植田, 2020) として仕上げていることを知った。植田は 2 枚の A4 用紙の縦方向の使用も 12 色の色名も筆者のやり方をそのまま踏襲している。ただし、筆者の教示「実のなる木の絵を描いてください」とは異なり、植田は「木を 1 本描いてください」という教示を用いており、したがって植田は自分のやり方を「黒 - 色彩樹木画テスト」と呼んでいる。ちなみに、植田は彼女の黒 - 色彩樹木画テストに対する検査者・セラピストの主観的体験について検討しているが、これは大変重要な視点であると思われる。

ともあれ、筆者が最後に黒 - 色彩バウムテストについて触れてから (名島, 2004) 少し年数が経っているので、今一度、黒 - 色彩バウムテストの意義や問題点について吟味してみたい。

II 教示の問題

バウムテストの教示の仕方について言えば、スイスの Karl Koch が出版した 1949 年のドイツ語原著初版 (*Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel.*) では、“Zeichnen Sie bitte einen Obstbaum, so gut Sie können. Sie dürfen das ganze Blatt benutzen.” であり、1952 年の英語版では、“Please draw a fruit tree, as well as you can. You may use a whole sheet.” である。そして、この英語版を日本語に訳した 1970 年の林勝造らによる『バウム・テスト—樹木画による人格診断法』では「実のなる木をできるだけ上手にかいてください。画用紙は全部使ってよろしい」と和訳されており、この『バウム・テスト—樹木画による人格診断法』に補遺として付けられている「日本におけるバウム・テスト」(国吉, 1970) では、「実のなる木を一本かいてください」となっている。そして、Koch の最後の著作となった第 3 版 (1957 年) では初版のときの教示の最後の部分、“Sie dürfen das ganze Blatt benutzen.” が削除されており (林, 1999 をも参照)、岸本ら (2010) による和訳では「果物の木を (一本)、できるだけ上手に描いてください」となっている。ちなみに、和訳者の 1 人である内科医の岸本は日々の臨床において、精神科医の山中康裕に倣って、「実のなる木を描いてください」という教示を行っているとのことである (岸本, 2015)。ともあれ、Koch の言う Obstbaum は果樹であり、「実のなる木」「果物の木」と同じことである。

2 枚法を行う Fodor ら (1966) は、まず黒色バウムについては“Zeichnen Sie bitte einen Obstbaum!” と教示する。そのさい、患者がバウムをかくことができないとか、学校以来かいたことがないなどと言ったときには、“Zeichnen Sie, so gut Sie können.” あるいは“Der Baum braucht gar nicht schön zu werden.” などと付け加えて言う。そして、黒色バウムの次の色彩バ

ウムについては、“Zeichnen Sie bitte einen Obstbaum mit Farben!”と教示する。

直接の執筆者名が明記されていないが、カトリック・マリア会・日本管区教育部が著者ならびに発行者となっている『シャル・コシュの「木のテスト」の解明』（1966年）では、教示は、「くだものなる木を書いてください。絵は大きくても小さくても、木は一本でも数本でも、好きなように書いてけっこうです。ただし、ブドウ・ヤシ・マツ・ヒマラヤスギは書かないでください」となっている（「書いて」となっているのは原文のまま）。[この本の直接の執筆者はフランス人と思われる。なぜなら、Emile MarmyとHenry Nielが翻訳者となった仏語版の*Le test de l'arbre*（1966年）が主要参考資料の欄に書かれており、独語版や英語版の書名は書かれていないからである。ちなみに、この仏語版の著者名はKarl KochではなくてCharles Kochとなっており、この『シャル・コシュの「木のテスト」の解明』の中での発音表記はフランス語読みの「シャル・コシュ」となっている。Charlesに対して日本でよく言われる「シャルル」よりも実際のフランス語発音に近い「シャル」という表記がなされているので、この本の執筆者はやはり、（日本語に堪能な）フランス人だと思われる。この本には、執筆者自身が行った日本人の小・中学生のバウム計91ヶ（写真入り）とその解釈が掲載されている。]

ところで、アメリカのJohn N. Buckは1948年に3枚の画用紙それぞれに「家」と「木」と「人」を鉛筆でかいてもらうという*The HTP Technique*を発表している（Buck, 1948）。このテストの2枚目にかいてもらう木の教示は、“Now, I want you to draw me as good a Tree as you can.”であり、Kochの「実のなる木」ないし「果物の木」とは異なっている。また、日本の高橋（1986）も、HTPPテスト（家と木と男性と女性の人物）で木をかかせる場合、「木を1本かいてください」という教示を行っている。高橋・高橋（1986）は『樹木画テスト』でも「木を1本かいてください」という教示を行っている。ハンガリーの牧師Károly Ábel神父の教えに基づいてバウムテストの解釈を深化させたBolander（1977）も、「木を1本かいてください」である。

子どものバウムテストに経験の深い津田浩一は、初めは標準教示として「木の絵をかいてください」がよいとしていたが（津田, 1976）、後にはKochが検討を重ねて決定した「実のなる木」のほうが自我の発動方向に一定の枠組みを与え、その枠内での各自のイメージに基づく木が得られるのでよしとし、「1本の実のなる木をできるだけ十分にかいて下さい」という教示を推奨している（津田, 1992）。バウムテストの発達的研究を行った山下真理子も、「実のなる木の絵を1本描いてください」という教示を行っている（山下, 1982）。

以上のように、教示が「実のなる木」か「木」かについてはいろいろな意見・見解がある。石井ら（2017）はKoch法群（実のなる木を1本描いてくださいという教示）とBuck法群（木を1本描いてくださいという教示）を比較して、Koch法群では対象者の87%が実を描き、Buck法群では82%が実を描かなかったという結果を見出している。つまり、「実のなる木」という教示が被検者に実を多くかかせていることになる。

「実のなる木」と「木」ではどちらが正しいのか正しくないのかと言うよりも、教示の仕方が異なっているので、それぞれ異なるテストであると考えたほうがよいかもしれない。もちろん、「木」という点は共通しているので、この2つは重なっているのであるが。ちなみに、黒一色彩バウムテストは2枚のバウムを比較する。つまり、黒色バウムに比べて色彩バウムはどうかという点からバウムを見ていくので、極端に言えば、教示はどちらでもかまわないと言ってもよい。

Ⅲ 黒色バウムと色彩バウムの比較

黒一色彩バウムテストにおいて比較するのは、①バウムの大きさ、②バウムのバランス、③バウムの内容の豊かさ、④バウムの早期型（初期型）、⑤その他である。

①はA4用紙に占めるバウムの面積で、バウム空間と呼んでいる。黒色バウムと色彩バウムの

どちらのバウム空間が大きいかに留意する。

②は文字通りバランスで、黒色バウムと色彩バウムのどちらのバランスがよいかに留意する。

③は「豊かなバウム」「貧弱なバウム」などと形容されるもので、黒色バウムと色彩バウムのどちらの内容が豊かであるかに留意する。なお、①から③についての詳細は名島（1996）を参照されたい。

④はバウムの早期型、例えば「幹下直」(Der Lötstamm) (下部が蓋のような形をした幹) や「一線幹」(Der Strichstamm) (1本の線のみで描かれた幹) が黒色バウムないし色彩バウムに見られるかどうか留意する。一谷ら（1968）によると、幹下直は幼稚園（年長）では29%に見られるが、小学校1年では4%、小学校2年では1%、小学校3年では0%、小学校4年では1%しか見られない。一線幹はもっと少なく、幼稚園（年少）が5%で、小学校以上は0%である。黒色バウムで一線幹が見られても色彩バウムでは二線幹になっているような場合、その被検者は、他者との情緒的交流によって心的エネルギーが増大するといったことが考えられる。

⑤はその他で、山中（1976）の「メビウスの木」、名島（2004）の「星形バウム」、村田（2002）の「バウムの種類」などがある。

山中のメビウスの木は漏斗状幹上開の特殊形で主として統合失調症や非定型精神病に見られるが、バセドウ病、白血病、心身症にも時に見られるという（山中, 2003）。原田（1998）によれば、統合失調症におけるメビウスの木の出現率は、黒色バウムで14%、色彩バウムで8%である。

筆者の星形バウムはバウムの実ないし葉が星形をしたもので（空の星などは含まれない）、統合失調症にまれに見られる。この星型バウムについては、もっぱら健常者を対象に研究したBolander（1977）が「大きな危機が問題になっているときのみ通常見られる」と述べているので、統合失調症以外にも見られるかもしれない。もっとも、筆者自身は統合失調症でしか経験していない。それもすべて、色彩バウムにおいてである。

もしもメビウスの木や星形バウムが黒色バウムで見られた場合、色彩バウムでも見られるかどうか注意する。

村田のバウムの種類については、2枚のバウムで同じ種類の木をかいている場合にはその人のセルフ・エスティームは低く、異なる種類の木をかいている場合にはその人のセルフ・エスティームは高いことに留意する。

IV 黒－色彩バウムテストの問題点

1. 比較することに伴う問題

これは筆者自身の反省点でもあるが、黒色バウムと色彩バウムをただ単に比較するだけで終わってしまうことがある。2枚のバウムの比較は長所でもあるが、短所でもある。検査者が比較することだけに目を奪われると、それぞれのバウムが有する意味を汲み取りそこなう危険性がある。

黒－色彩バウムテストはテストであるが、被検者からすれば検査者への非言語的コミュニケーションとなる。特に、検査者がカウンセラー（セラピスト）でもある場合にはコミュニケーションとしての比重が高まってくる。クライアント（来談者）はカウンセラーの依頼に応じて、バウムという表現手段を用いて言外の意味をカウンセラーに伝達しようとする。これが鉛筆による黒色バウム1枚だけであれば、その1枚から可能な限り潜在的な意味を汲み取ろうとする強い姿勢が出てこよう。また、内科医の岸本（2015）の言うように、患者がかいた1枚のバウムのイメージを徹底的に温めながら治療するといった姿勢も出てこよう。黒－色彩バウムテストのように2枚のバウムがあると、読み取りがあいまいになってしまう危険性がある。

2. 色彩バウムに使われる色の数と色名について

色の使用数については一般的に言って、使用数が多くなればなるほど外界からの情緒刺激に対する応答性は高くなる（名島ら、1974）。

健常者における色彩バウムの色の数の平均値は、今村（1998）によれば、6歳が4.33色（男4.22色、女4.44色）、7歳が4.31色（男3.78色、女4.83色）、8歳が4.84色（男4.12色、女5.67色）、9歳が6.07色（男5.57色、女6.81色）、10歳が6.60色（男5.80色、女7.40色）、11歳が6.03色（男6.25色、女5.81色）、12歳が5.11色（男4.70色、女5.54色）、13歳が4.25色（男4.10色、女4.44色）、14歳が4.62色（男4.28色、女5.03色）、15歳が5.11色（男4.39色、女5.88色）である。それ以上の年代の平均値は、名島（1999）の調査によれば、10歳代後半が4.87色（男4.57色、女4.91色）、20歳代前半が4.71色（男4.54色、女4.83色）、20歳代後半が4.27色（男3.81色、女4.71色）、30歳代が4.88色（男4.45色、女5.04色）、40歳代が4.54色（男5.27色、女4.40色）、50歳代が4.64色（男5.40色、女4.54色）である（20歳代のみ前半と後半に分けた）。ここでの色の数はすべて樹木の色のみであり、地面や空、太陽などの色は除外されている。

全体的に見れば、樹木の色の数は4色から5色の範囲に入るが、9歳から11歳は6色と多い。ちなみに、色の数はこれら以後特に調査していないので、現在の時点で調査すれば数値が少し異なってくる可能性はある。

植田（2020）によれば平均年齢22.1歳（19~47歳）の私立女子大学生の色の数の平均は5.27色であり、名島（1999）の20歳代前半の女性の平均値4.83色よりも多くなっている。植田の場合、「使用された色の総数をカウントした」と記されているので、樹木以外の色もカウントされた可能性がある。今後、例えば20歳代の被検者群、21歳の被検者群、22歳の被検者群といった具合に各年齢を揃え、年齢ごとの樹木の色の数の平均値と、樹木以外の背景（地面や空など）の色も含めた色の数の平均値を出すことが望ましい。

ところで、色の数だけについて述べてきたが、検査者としては、どのような色が使われているのかということにも注意を払いたい。例えば、同じ2色の色彩バウムと言っても、茶色い幹と枝に黒色の濃い線が混ざり合っているような色彩バウム（暗いバウム）と、茶色の木に明るいピンク色の花がたくさん咲いているような色彩バウム（明るいバウム）では、意味するところが違ってくるであろう。特に前者のような暗いバウムの場合には、描画後質問で抑うつ気分、自殺念慮、食欲不振、睡眠障害などがあるかどうかをこまかく聞いたり、日本版BDI-II（ベック抑うつ質問票）（小嶋・古川訳著、2003）を行ったりする必要が出てこよう。

3. 色彩バウムにおける黒色の使用

Fodorら（1966）と異なり、筆者は色彩バウムのために用いる色のなかに黒色を入れている。割合としては黒色をまったく使わない人のほうが多いが、しかし、被検者のなかには黒色だけ使ってあとの11色を使わない人がいるし、幹や枝を黒色で縁どって、中を茶色に塗る人もいる。また、幹の茶色の上に黒色の線を何本も引く人がいるし、茶色の幹、茶色の枝、緑の葉を描き、最後に赤い実をかいて黒色のへたを付け加える人もいる。[筆者の手元にある健常者の大学生・大学院生等計152名（平均年齢23.5歳）の色彩バウムを見てみると、色彩バウムのなかになんらかの形で黒色を使用した人は55名（36.2%）、黒色をまったく使わなかった人は97名（63.8%）であった。なお、バウムの背景に黒色を使用した場合はここに含めていない]

このように、黒色は色彩バウムにおいてさまざまな使われ方をするが、もしも色彩バウムに黒色が使われた場合には、念のため前節で触れたように適切な質問やBDI-IIを用いるほうがよいように思える。

果実のへたは普通、茶色や緑色、赤色（リンゴの実の場合）等がかかれる。しかしなかには、他の部分は自然色で果実のへたの部分だけ黒色を使用しているような場合がある。へたはほんの

数ミリ、長くても1cmくらいであって、仮に5ケの実とへたをかいたとしても黒色の使用量はごくわずかなので、特に気にする必要はないという意見があるかもしれない。

筆者の手元には、BDI-IIを同時施行しているのが被検者のうつ症状の重篤度が分かり、しかも、色彩バウムで果実のへただけを黒色でかいているような計10名のバウムがある（黒色のへた以外の部分は幹や枝の茶・実の赤・葉の緑など）。彼らのBDI-II得点は低いものから列挙すると、2（32歳男性）、4（19歳女性）、6（20歳男性）、7（19歳女性）、9（24歳男性）、10（24歳男性）、15（32歳女性）、16（19歳女性）、23（22歳男性）、30（19歳女性）となる（平均は12.2点）。BDI-IIの重篤度は、0-13が極軽症、14-19が軽症、20-28が中等症、29-63が重症である。こうしてみると、10名中6名は極軽症であるものの、10名中2名は軽症、1名は中等症、1名は重症となる。このような結果からすれば、たとえ果実のへたの部分だけの黒色使用であっても検査者としては注意しておく必要がある。

ところで、自殺関連の事柄について被検者に質問するような場合、例えば「最近気が沈んだりすることはありますか」（抑うつ気分についての質問）ときいて、被検者が「はい、あります」と言ったら、「ひょっとして死にたいな—とったりすることはありますか」ときいてみる（希死念慮についての質問）。被検者が「実は、そう思ったりもします」と言えば、「自殺したいな—としたりはしませんか」ときく（自殺念慮についての質問）。被検者が肯定したら、「これまで実際に自殺を試みたことはありますか」と単刀直入にきいてみる（過去の自殺企図歴についての質問）。そして、被検者が肯定したら、これまで何回自殺を試みたことがあるのか、それはいつ・どこで・どのように試みたのか・どのようにして助かったのかといったことについて詳しく質問する。これらは、自殺の危険度を見定めるために必要な質問である。なお、希死念慮や自殺念慮についての質問に対して被検者が否定するような場合、検査者は被検者の声のトーンや表情に気をつけておく。何か疑わしいような場合には、「気分が沈むと多くの人は死にたくなったりするものですが、あなたの場合にはそんなことはないのですね」と確認的に質問してみる。

4. 逸脱色について

木の幹や枝を茶色系統で、葉を緑色系統で、実を赤色や黄色系統でかくというのは自然に沿った色彩選択である。逸脱色とはこのような自然かつ平均的な色の使い方とははずれた色の使い方であり、紫色の実とか、赤色の幹とか桃色の葉などが相当する。

逸脱色は、被験者が何の木をかくのかということとも関係する。例えば、「熱帯の木を描いた」「これまでに見たことのない木を描いた」「暗い夢の木を描いた」などでは当然、平均的な使用からははずれた逸脱色の使用が多くなる。ある20代の大学生は描画後質問で、「あれこれ想像しながら、楽しみながらかいた」と述べた。彼女は木全体で10色、果実のみで6色もの色を使用していた。

小・中学生の色彩バウムを調査した今村（1998）は逸脱色の条件として、①根・幹・枝に茶色が使用されていないこと（茶色と肌色、茶色と橙色、茶色と黒色の混ぜ合わせが使用されていないことも含む）、②樹冠や葉に緑色あるいは黄緑色が使用されていないこと、③実に赤・黄・橙・桃色が使用されていないこと（栗や葡萄などは例外とする）、④木の花に赤・黄・橙・桃色が使用されていないことを定めている。

V 色彩バウムの類型

Fodorら（1966）は色彩バウムの類型について触れていないが、色の使い方や色の数から見て、色彩バウムは、①基本型（basic type）、②精緻型（elaborate type）、③逸脱型（deviant type）、④混乱型（confusing type）、⑤収縮型（constrictive type）、⑥回避型（avoidant type）の6つに分類できよう（名島、1999を参照）。

①は4色程度の自然色で、平均的かつ自然な感受性を意味する。

②は多くの色彩を使って微妙な色合いが表現されているバウムで、繊細な感受性を意味する。ただし、繊細なだけに傷つきやすいといった側面もある。バウムの形態水準は高い。

③は前章で述べた逸脱色を使用しているもので、現実吟味力の低下があり、妄想を含む思考障害の可能性があることを意味する。ただし、これはあくまでも入院治療中の統合失調症者の場合である（妄想型と緊張型の統合失調症者47名の32%に逸脱色あり）（名島ら、1974）。健常者の逸脱色の場合は、「夢の木」「お菓子の木」「空想の木」などユーモアや遊びに満ちていることが多く、思考障害とは無縁となる。いずれにせよ、被検者が何の木を描いたのかということを描画後質問でしっかりと確認しておく必要がある。ちなみに、植田（2020）の調査では、統合失調症者14名に逸脱色は見られなかったとしている。彼女の調査は入院中の統合失調症者9名以外に通院中の統合失調症者5名を対象としており、たぶん、全員の病状が安定しているがために逸脱色が見られなかった可能性がある。もちろん、調査対象者の人数が少なかったということも考えられるが。

既に名島ら（1993）で触れたが、ある40代の入院統合失調症者Aは、落ち着いているときには赤と黄色（実）、緑色（葉）、茶色（幹と枝）の4色（自然色）であったが、彼の関係妄想が活発化しはじめたときには、黄色と紫色（実）、茶色（幹と枝）の3色となった。つまり、いくつもある実の一部に紫色という色が使用されていた。このように、同一人でも病状によって色彩バウムに逸脱色が見られなかったり見られたりする。[Aがかいた最初の色彩バウムは地球が爆発するような感じがして全裸になって暴れたり煙草の火を自分の手の甲に押しついたりするというパニック状態がおさまってからしばらくしてかいたもので、そこには3枚の星型の葉（緑色）が3本の枝（茶色）につけられていた（星型バウム）（Aの黒色バウムは大きなリンゴのような実が2つなっている木）。Aがその3カ月後の2回目にかいたバウムは自然色（4色）の基本型バウムで、Aは落ち着き、わずかではあるが他の患者さんとの交流も見られていた。そして、その約9カ月にかかれたものがここで取り上げた逸脱型バウムであり、関係妄想が活発化しはじめていた。]

自我機能の働き方が神経症水準や境界例水準の場合にも、逸脱型バウムがまれに見られることがある。例えばある20代の男性の色彩バウムは、赤色のみで幹・枝・果実等が描かれていた（幹の赤い傷を除けばすべて輪郭線）。彼の場合、吃音に関する強度の予期不安と社交不安症によって現実吟味力がひどく低下していた。

④は数多くの色彩が乱雑に使用されているもので、感情面の混乱・無統制状態を意味する。色彩の乱舞で、バウムの形態をなしていないことが多い。そう状態、躁病に典型的に見られよう。

⑤は1色ないし2色のみの自然色（茶色の幹と緑の葉等）で、感情の抑制傾向を意味する。言い換えれば、外界からの情緒刺激に対する応答性の低さがうかがえる。例えばある20代の男性は不眠、抑うつ気分、喘息、自信喪失感などに悩まされていたが、彼がかいた色彩バウムは茶色の幹と枝で、幹のなかほどにはうろがあり、うろの中は黒い斜線が何本も入っていた。木のうろはもともと黒っぽいので、彼の色彩バウムは2色の自然色であると言えよう。

⑥は12色のなかの黒色のみが使用されているもので、これは鉛筆による黒色バウムと同じになる。ごくまれにしか生じない。これは一種の色彩回避（color avoidance）であり、感情の回避、つまり他者との感情的・情緒的な関わり合いを回避ないし忌避する傾向性を意味する。

黒一色彩バウムテストの解釈に際しては、黒色バウムと色彩バウムを比較するとともに、これらの色彩バウム類型も考え合わせるとよい。

Ⅵ 中井久夫の懐疑について

精神科医の中井久夫はかつて芸術療法という雑誌に「バウム・テストの普遍性へのささやかなる懐疑」と題する論文を書いている(中井, 1985)。取り上げられているのは精神分裂病者(現在の統合失調症者)のバウムである。中井は、彼が1969年に創案した「風景構成法」でもバウムテストでもそれぞれ彩色してもらっている。手順としてはまずフェルトペンで風景構成法の各アイテムを順に描いてもらい(川→山→田→道→家→木→人→花→動物→石とか岩のようなもの→足りないと思うもの・描き足したいと思うもの)、終わったらそれを次にクレヨンで彩色する。バウムも同様にしてもらう(はっきりと明記されていないが、バウムテストの場合にはたぶん鉛筆で、次いでクレヨンとなる)。つまり、バウムに関して言えば色彩バウムだけになる。

中井は上述の論文で、「確かに、冬枯れの木が緑になることは、回復の比較的信頼できる証拠である。しかし、どうであろうか。無残に歪んだ、褐色のあれらの木はあまりに画一的でありはしないか。患者そのひとつについての理解をそれほど治療者に向かって開くであろうか。鋭敏な人には、あるいはそれは可能かもしれない。しかし、その場合も、患者の樹には、苦悩のさ中に楽しい歌を歌わさせられるのと同じ呻きが混じってはいないか。」「分裂病の苦痛な時期、分裂病でなくとも、保護と内閉を保証するのが治療的である時に、伸び、芽を出し、繁り、花を咲かせ、実のなるものを描いてもらうことはいかがであろうか。それは、患者の状況について内実性のある結果をもたらすであろうか。すでに古くから、バウム・テストの『木』がなお冬枯れの時に、『風景構成法』における『木』が緑になっていることが気づかれていた。これは、おそらく桦や他の風景構成因子による影響であろう。『木』はもはや、画の宇宙的ともいべき中心的存在でなく、点景であり、そういうものとしてならば緑の木であるうるわけだ。」「回復に向かう過程の、ある点までは、バウム・テストは患者の情調性に不即応な点が、それ自体の偏向をもたらし、患者にも多少の外傷を与える可能性があるまいか。」と述べている。

中井の懸念は、実のなる木の絵をかいてもらうという作業自体が病に苦しむ病者にとって心理的な外傷体験になる可能性があるのではないだろうかということである。ここには、テスター(検査者)ではなくて、セラピスト(治療者)としての中井の目が光っている。統合失調症という厳しい病と戦っている病者に対して極力余分な苦痛を与えまいとする治療者としての目である。このような視点からバウムテストを論じた人は、筆者の記憶する限り他にはいない。

中井の文章から筆者が思うこととして、以下がある。

まず、教示について言えば、少なくとも統合失調症者に対しては、「実のなる木」よりも「木」のほうが好ましいであろう。一般に、テスターから「実のなる木をかいて」と言われると、被検者としては実のなる木を思い浮かべがちである。病者によれば、花が咲かない自分、実がならない自分というものを改めて突きつけられることになるかもしれない。

次に、黒一色彩バウムテストを行うさいには細心の注意を払うようにする。必要があつて黒一色彩バウムテストを行うような場合、テストを行うことについて病者の合意を得るようにする。それと同時に、テストを拒否する自由、あるいはテストを中断する自由を前もって言葉で保障しておく。言うまでもなく、表情ないし言葉で嫌だと言っている病者に無理やりバウムをかかせたりすることはできない。また、(実際にはほとんどないと思えるが)集団施行ではやらないようにする。[筆者はこれまで多くの統合失調症者に対して黒一色彩バウムテストを行ったが、すべて1対1の個別施行であった。集団施行は一斉にやるので、1人1人の細かい様子がよく分からないし、何かが生じた場合に対応できない。中井が触れているように、例えば集団場面の音楽療法で楽しい歌を歌わされようとする病者のつらさといったものには留意しておきたい。]

最後に、病者の様子を見て、病者が中井の言う「保護と内閉を保証するのが治療的である時」にいると思われるような場合には、黒一色彩バウムテストを控えるほうがよい。ただし、ある特

定の病者について保護と内閉を保証するのが治療的であるかどうかがよく分からないような場合には、主治医に相談してみる。なお、カウンセラー（セラピスト）とは別の人が黒－色彩バウムテストを施行しようとする場合には、その人は黒－色彩バウムテストを行ってもいいかどうかをカウンセラー（セラピスト）ないし主治医に相談してみる。

Ⅶ テスト結果のフィードバックについて

筆者は、黒－色彩バウムテストを終了したらすぐに結果を被検者にフィードバックするということを約束してからテストに入るようにしている。

問題はフィードバックの内容である。別のところで少し触れたが（名島，1999）、病院臨床場面で黒－色彩バウムテストを行っていた原田則代（臨床心理士）は、病室のなかにひきこもっていたある40代半ばの女性統合失調症者に対して、彼女は十分に他者からの情緒刺激に応じる力があるということ彼女に告げたところ、彼女は翌朝から病院内の皆と一緒にラジオ体操に出るようになったという（原田，1997）。彼女の色彩バウムは自然色であり、色彩バウムの大きさは黒色バウムの約2倍あった。この原田のケースは、黒－色彩バウムテストの治療的活用と言えるものであろう。

ところでこの場合、もしも色彩バウムの大きさが黒色バウムよりも約2倍小さく、しかも色彩バウムのバランスが黒色バウムよりも悪化していたとしたらどのようなフィードバックが可能であろうか。その場合には例えば、「あなたは他人と情緒的に関わると混乱させられたいしますので、巻き込まれないようにするとよいかもかもしれません。他者との関係の持ち方について、何かよいやり方を思いつきませんか」といったことが考えられる。

いずれにせよ、黒－色彩バウムテストの結果のフィードバックを通して病者の生きる力が出てきたり、病者がよりよく生きていくための方策を2人で検討したりすることが大切となる。その意味では、黒－色彩バウムテストと言うよりも、黒－色彩バウム法と言うほうが適切かもしれない。

Ⅷ 黒－色彩バウムテストの展開

臨床心理士の河合可南子は、「未来の木」という新しいやり方を提案している（河合，2008；河合ら，2008，2009）。これは、A4用紙の1枚目に鉛筆で実のなる木をかいてもらい、2枚目には1枚目にかいたバウムの未来像（未来の木）をかいてもらう。そして、描画後質問において、1枚目の木と未来の木との違いは何か、この木が未来の木のように成長するために必要なものは何か、あるいはこの木が未来の木のようにならないために必要なものは何かといったことを被検者に問かけるといふものである。

黒－色彩バウムテストの場合には、被検者が2枚目の色彩バウムをかきおえた後の描画後質問において、この色彩バウムの未来はどのようなものになるのかという質問を被検者に投げかけてみると何か新しい展開が得られるかもしれない。以下に実例を示す。

70代前半のある女性Bはやむを得ない事情で抱えることになった多額の借金の返済のためにいくつものパートの掛け持ち仕事を長年続けていたが、それに伴う対人的ストレスや体の部分的な故障などで鬱屈することが少なくなかった。Bがかいたバウムは、黒色バウムに比べて色彩バウムのバウム空間が少し大きくなってはいたものの、バウムのバランスや内容はほぼ同等で、色彩バウムの色は、幹と枝の茶色、葉の緑色、柿の実の橙色という3色であった（自然色）。また、ほぼ直立している黒色バウムに比べると、色彩バウムの幹は上方が左方向に傾いていた（受動性と受容）。さらに、色彩バウムの幹の表面には大きな楕円状の塊が2つも描かれていた。これは一見うろ（樹洞）のように見えたが、Bの説明では、この2つの楕円状の塊は樹皮がひどくよれ

たもので、この木の樹齢の長さを表しているとのことであった。ちなみに、3色という色の数について問うと、Bは、「私の人生はそんなにカラフルではない。自分がやりたいことはできなかった」と答えた。

ここで筆者は河合の未来の木のやり方を借りて、Bに、「この木（色彩バウム）は将来どうなると思いますか」と質問してみた。するとBは、「柿の実は今よりは多くなりましたが、来年はどうなるか分からない。実は多かったり少なかったり。でも、この木自体はどんどん栄えていく。孫子の代まで栄えさせないといけない。それが嫁としての私の役割だと思います」と答え、筆者は驚いた。「孫子の代」という言葉が印象的であった。

以上のように、Bがかいた黒－色彩バウムテストからはAが抱えている人生上のわずらいからくるネガティブな側面（Bの比喩を借りれば「カラフルではない人生」）がうかがえるが、筆者が色彩バウムの未来を問うことによって、Bの生きる姿勢（健気さ）と方向性がくっきりとした形で浮き上がってきている。

その他、色彩バウムテストの未来について質問してみると、「この木はこのまま火のように燃え盛って行って、最後は燃え尽きてしまう」「うまく手入れをすれば木は生き続けるが、手入れをしないと枯れてしまう」など、大変興味深い答えが少なくない。

Ⅹ テストバッテリーについて

黒－色彩バウムテストは性格テストの1つであるが、被検者のパーソナリティを理解するという点から見た場合、あくまでも黒－色彩バウムテストのみから理解しようとするのか、それとも他のいくつかの性格テストや知能テストなどを組み合わせたほうがよいのかという問題がある。1人の被検者に費やせる時間とかテストの技量にもよるが、筆者自身は、できればいくつかのテストを組み合わせるほうがよいのではないかと考える。以下、秋吉（2005）が提示したバウムに基づいて説明する。

ある10代後半の女子大学生Cの色彩バウムは、12色がすべて使用されていたが、木の幹の表面は黄色・茶色・黄緑・空色などが入り混じっていて明るく、しかも、幹の途中には、口を開けて笑っている女性の横顔（空色の睫毛と赤い唇）が描かれていた（幹の茶色い輪郭線の一部が女性の横顔となっていた）。樹冠部は種々の色の細くて丸い線が重なり合って、笑っている女性の髪の毛として描かれていた。黒色は樹冠部にほんのわずか使用されていた。色彩バウムは幹が非常に太い木であったが、木の左半分しかかかれておらず、木全体がかかれた黒色バウムとは対照的であった。色彩バウムの幹の根元は、左半分だけであったが、ひどくひろがっていた。また、色彩バウムは樹冠部の上方と右側ならびに幹の右側が紙の縁からはみ出していた。地平線は根から上であった。

ところで、同時に行われたCのCMI（金久ら、2001）は第Ⅲ領域（どちらかと言えば神経症である可能性が高い）であった。また、BDI-IIは32点で、Beckらの基準（小嶋ら訳、2003）からすればsevere（重症）に入り、抑うつ度が大変高い。ちなみに、日本人の大学生では6.4%がこのsevere（重症）に入っている（西山ら、2009）。

以上をまとめると、Cは一見活力があり、繊細かつユーモア精神にあふれ、他者との関係性を大切にす半面、ひどく内向的で傷つきやすく、感情に走りすぎ、思考はゆっくりで、人からの評価を気にしすぎる側面がある。また、自分を安定させようとする強い欲求がある。色彩バウムの笑う女性は、他者向けの仮面とも言える。何とかして他者からの評価に自分を合わせようとする。あるいは、他者の動きに追従しようとする。しかしそれは、CMIやBDI-IIに見るように、Cの心をひどく悩ませ、抑うつ的で重苦しいものにしていく。

ここでは投影法の黒－色彩バウムテストに質問紙法のCMI・BDI-IIが組み合わせられ、それに

よって、Cのパーソナリティはより深くつかめている。なお、BDI-IIの項目9「自殺念慮」でCは、「1 自殺したいと思うことはあるが、本当にしようとは思わない」を選択していた（1に丸印をつけていた）。項目9の「2 自殺したいと思う」や「3 機会があれば自殺するだろう」に比べると、Cの自殺危険性はそれほど高くないと言えよう。

X 黒一色彩バウムテストの限界について

筆者は長年黒一色彩バウムテストを行っているが、いまだによく分からないことも少なくない。特に分かりにくいのは、被検者の気分状態がそのまま色彩バウムに反映されないことがあるということである。前章で述べた笑う横顔の木の場合にはわずかではあるが黒色を使用されていたことや幹の右半分が完全に欠如していたことなどから被検者の心理状態が不穏であることを推測できるが、なかにはそういった手がかりがまったくないような色彩バウムもある。

ある40代の境界パーソナリティ障害の女性のBDI-IIは42点という高得点であったが、彼女の色彩バウムは、赤いリンゴの実、茶色の幹、緑色の包冠線という3色であった（自然色）。バウム空間は黒色バウムとほぼ同じで、どちらもA4の画面の半分以上を占める大きな木であった。バウムのバランスは色彩バウムのほうがよかった。

別の20代の男性はCMIが第Ⅲ領域（どちらかと言えば神経症である可能性が強い）であったし、BDI-IIも15点あったが、彼の色彩バウムは、赤色の実、茶色の幹、緑色の包冠線、樹冠部の黄緑色という4色であった（自然色）。バウムの大きさは黒色バウムも色彩バウムも画面の3分の2以上を占める大きな木であった。バウムのバランスはどちらもよかった。

以上の2名の黒一色彩バウムは特にこれといって問題のないごく一般的なバウムであり、それだけに、CMIやBDI-IIの結果との乖離が不思議な感じがする。その理由がよく分からない。これは結局、黒一色彩バウムテストの持つ限界と言ってよいかもしれない。

XI おわりに

本稿では筆者が名づけた黒一色彩バウムテストについてこれまでの研究を振り返るとともに、黒一色彩バウムテストの問題点や新しい展開、さらには黒一色彩バウムテストの限界についても触れた。

文献

- 秋吉さつき（2005）Personal communication.
- Bolander K（1977）Assessing personality through tree drawing. New York, NY: Basic Books Inc.（高橋依子訳，1999，樹木画によるパーソナリティの理解，ナカニシヤ出版）
- Buck JN（1948）The H-T-P technique: A qualitative and quantitative scoring manual. *Journal of Clinical Psychology*, 4(4).（加藤孝正・萩野恒一訳，1982，HTP診断法，新曜社）
- Cohen BM, Mills A, Kijak AK（1994）An introduction to the diagnostic drawing series: A standardized tool for diagnostic and clinical use. *Journal of the American Art Therapy Association*, 11(2), 105-110.
- Fodor Von S, Kendel K（1966）Vergleichende Beobachtungen von schwarzen und farbigen Baumzeichnungen bei psychotischen Patienten: Ein Beitrag zur objectiven Untersuchung der Affektivität bei Pychotikern. *Schweizer Archiv für Neurologie, Neurochirurgie und Psychiatrie*, 97, 361-386.
- 原田則代（1997）Personal communication.
- 原田則代（1998）健常者群と精神分裂病群における黒一色彩バウムの比較 未発表資料
- 林勝造・国吉政一・一谷彊（訳）（1970）バウム・テスト—樹木画による人格診断法 日本文化科学社
- 林勝造（1999）Karl Kochに届かなかった手紙—バウムテストについての質問 臨床描画研究, 14, 136-142.
- 一谷彊・林勝造・津田浩一（1968）樹木画テストの研究—KochのBaumtestにおける発達の検討 京都教育大学紀要, Ser. A, 33, 47-68.
- 今村初美（1998）色彩バウムと発達段階との関連性 平成9年度熊本大学教育学部心理学科卒業論文
- 石井雄吉・藤元祥子（2017）樹木画テストにおける教示方法の違いが実の出現に及ぼす影響 心理臨床学研究,

- 35(4), 422-426.
- 岩井寛・金盛浦子・渡辺勉・藤田雅子・田久保栄治・蔦政和 (1980) 幼児・児童の発達過程に関する「樹の描画」の検討 芸術療法研究, 11, 25-37.
- 金久卓也・深町建・野添新一 (2001) 日本版コーネル・メディカル・インデックス—その解説と資料 改訂増補版 三京房
- カトリック・マリア会・日本管区教育部 (1966) シャール・コシュの「木のテスト」の解明—青少年の精神指導資料 カトリック・マリア会・日本管区教育部発行
- 河合可南子 (2008) バウムテスト 2 枚法における「未来の木」の試み 山口大学大学院教育学研究科修士論文
- 河合可南子・名島潤慈 (2008) 「未来の木」の特徴と意義 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 26, 167-176.
- 河合可南子・名島潤慈 (2009) バウム研究における「未来の木」の位置づけ 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 27, 99-104.
- 岸本寛史 (2015) バウムテスト入門—臨床に活かす「木の絵」の読み方 誠信書房
- Koch K (1957) *Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. 3. Auflage.* Bern: Verlag Hans Huber. (岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男訳, 2010, バウムテスト [第3版] —心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究, 誠信書房)
- 小嶋雅代・古川壽亮 (訳著) (2003) 日本版 BDI-II—ベック抑うつ質問票 手引 日本文化科学社
- 国吉政一 (1970) 日本におけるバウム・テストの研究 (林勝造・国吉政一・一谷彊訳, バウム・テスト—樹木画による人格診断法, 日本文化科学社, 111-150)
- 増田勝幸・名島潤慈 (1975) 色彩バウムに関する研究—正常者と分裂病者の比較 廣島医学, 28:8, 128-129.
- 道廣倫子・玉木健弘・日下部典子 (2010) 幼児期における色彩バウムテストと CBCL の関係 福山大学こころの健康相談室紀要, 4, 75-80.
- 水口公信・蝶間林一美 (2000) 末期癌患者の樹木画に関する研究 心身医学, 40(6), 456-463.
- 森信之 (1998) 児童の無気力傾向と色彩バウムテストとの関連性 平成9年度熊本大学教育学部心理学卒業論文
- 村田敏晴・村田陽子・名島潤慈 (2001) 黒色バウムと色彩バウムの比較—描画の順序効果とバウム内容の検討 山口大学心理臨床研究, 1, 23-27.
- 村田陽子 (2002) セルフ・エスティームと黒—色彩バウムテストとの関連性 山口大学心理臨床研究, 2, 89-97.
- 武藤翔太 (2018) 統合型 HTP 法の分析・解釈の精緻化および臨床心理学的援助への応用 明治大学大学院文学研究科博士論文
- 名島潤慈・増田勝幸・増田徳幸・増田文枝 (1974) 色彩 Baumtest に関する研究 (1) ロールシャッハ・テストとの対応性 第25回中国四国精神神経学会発表資料
- 名島潤慈・増田勝幸 (1993) バウム・テスト (上里一郎監修, 心理アセスメントハンドブック, 西村書店, 223-238)
- 名島潤慈 (1996) 黒—色彩バウムテスト二枚法の意義 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 45, 271-281.
- 名島潤慈 (1998) 色彩バウムと抑うつ状態との関連性 熊本大学教育実践研究, 15, 1-5.
- 名島潤慈 (1999) 黒—色彩バウムテストの解釈 熊本大学教育実践研究, 16, 61-65.
- 名島潤慈・原田則代・横田周三・森田裕司・増田勝幸・植村孝子 (2001) バウムテスト (上里一郎監修, 心理アセスメントハンドブック 第2版, 西村書店, 186-197)
- 名島潤慈 (2004) 心理アセスメントにおける黒—色彩バウムテスト・自画像・真珠採り・夢 (1) 山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 17, 143-156.
- 名島潤慈 (2009) ロールシャッハテストにおけるクロッパー法の解釈 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 28, 131-139.
- 中井久夫 (1985) バウム・テストの普遍性へのささやかなる懐疑 芸術療法, 16, 63-64.
- 中村仁志・太田友子 (2011) 中学生のこころの状態と「色彩樹木画」との関連について 山口県立大学看護栄養学部紀要, 4, 21-26.
- 中村仁志・太田友子・丹佳子 (2012) こころの問題に対して「色彩樹木画」を用いた介入 山口県立大学看護栄養学部紀要, 5, 29-36.
- 西山佳子・坂井誠 (2009) 日本人大学生に対するうつ病評価尺度 (日本版 BDI-II) 適用の可能性 行動療法研究, 35(2), 145-154.
- 瀬下真都香 (2000) 黒—色彩バウムテストと抑うつとの関連性 熊本大学教育学部心理学卒業論文
- 高橋雅春 (1986) HTPP テスト (家族画研究会編, 臨床描画研究1, 金剛出版, 50-67)

- 高橋雅春・高橋依子（1986）樹木画テスト 文教書院
- 津田浩一（1976）バウムテストの教示効果について 心理測定ジャーナル, 12(3), 5-10.
- 津田浩一（1992）日本のバウムテスト—幼児・児童期を中心に 日本文化科学社
- 植田愛美（2013）統合失調症における描画についての研究—黒—色彩樹木画テストを用いた基礎的研究 大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科修士論文
- 植田愛美（2018a）描画を眺める際における熟練者の主観的体験に関する研究—黒—色彩樹木画テストを通して 佛教大学大学院紀要 社会福祉学研究科篇 社会学研究科篇 教育学研究科篇, 46, 135-148.
- 植田愛美（2018b）黒—色彩樹木画テストにおける主観的描画体験についての研究 臨床描画研究, 33, 83-99.
- 植田愛美（2019）黒—色彩樹木画テストを用いた基礎的研究—統合失調症群と健常群の比較を通して 佛教大学大学院紀要 教育学研究科篇, 47, 55-74.
- 植田愛美（2020）黒—色彩樹木画テストにおける心理臨床学的意義とその適用に関する研究 佛教大学博士論文
- 山口奈保（2008）色の使用がバウムテストに及ぼす影響—再考 京都学園大学付属心理教育相談室紀要, 6, 42-56.
- 山中康裕（1976）精神分裂病におけるバウムテストの研究 心理測定ジャーナル, 12(4), 18-23.
- 山中康裕（2003）こころと精神のはざままで 2 バウムテスト論考 臨床心理学, 3(2), 239-245.
- 山下真理子（1982）バウムテストの発達の研究—樹冠と幹の発達の傾向および空間関係の描写について 教育心理学研究, 30(4), 23-28.